

学校における部落問題学習と部落や部落出身者に対する認識とのクロス集計

石川 結加（大阪芸術大学教養課程）

1. はじめに

本報告の目的は、「2025年大学生調査」（以下、「本調査」）の結果を踏まえ、調査対象である3大学の学生の部落や部落出身者に対する認識とこれまでに学校で経験した部落問題学習との関係をクロス集計し、そこから得られた主な知見を明らかにすることである。その理由は、一つに同じ対象者ではないため単純に比較することはできないが、「本調査」の基本報告で示されたとおり「部落問題を知らない」割合は、「2022年内閣府調査」で14.7%、「本調査」では21.4%となっており、6.7ポイント上昇している点が挙げられる。

二つに、部落問題の認知経路のうち「(小学校から大学までの)学校の授業」の割合は、「2022年内閣府調査」で47.2%、「本調査」では57.9%を占め、10.7ポイント増加しており、「部落問題の認知経路」の中で最も高い割合となっている。「部落問題を知らない」割合が増加する一方、「部落問題を学校の授業で知った」割合が上昇していることから、学校における部落問題学習が部落や部落出身者に対する認識に与える影響が増していると考えられる。これら2つの理由に加えて、「本調査」は、部落や部落出身者に対する認識をレイシズム(人種主義に基づく差別)という理論的枠組みを軸に分析していることから、レイシズムの3つのカテゴリー(古典的/現代的/リベラル)から部落や部落出身者に対する認識と部落問題学習との関係を明らかにしたいと考えた。

そこで本報告は、「本調査」の回答者の合計667人から【Q3】「部落問題の認知経路」の「知らない」と「回答なし」を除いた「(部落問題を)知っている」回答者512人のデータを分析対象とする。512人の中には学校教育以外の場で部落問題を認知した人も含まれる。クロス集計した質問項目は次の通りである。【Q7】「部落問題学習経験」あるいは【Q8】「部落問題学習内容」と以下の2つの領域における質問項目である。一つ目の領域は「部落や部落出身者に対する差別意識や態度」で、具体的な質問項目は、【Q9】(部落差別があると思うか)、【Q11】(人に対する差別意識)、【Q12】(土地に対する忌避意識)、【Q14-17】(4つの場面設定における土地に対する忌避意識)である。二つ目の領域は、「古典的/現代的/リベラル・レイシズム」で、具体的な質問項目は、【Q13.4, .14, .16】(部落や部落出身者に対して感じることに「賛成」が最多の上位3つ)、【Q13.6, .9, .13】(部落や部落出身者に対して感じることに「反対」が最多の上位3つ)である。「賛成」と「反対」のそれぞれ最多上位3つは「本調査」の基本報告の表Q13を参照しており、これら6つの集計が「本調査」結果の特徴を示していると考えられる。最後に、これらのクロス集計から得られた現行の部落問題学習の特徴に関する主な知見をまとめる。

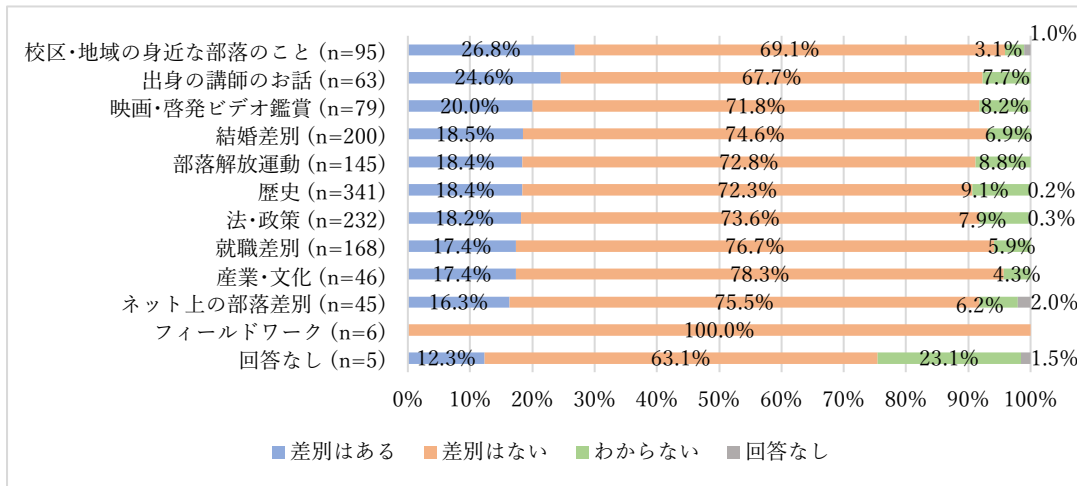
なお、本報告書は「本調査」の速報としてまとめたものであり、詳細に渡る分析は他稿に譲ることとする。

2. クロス集計

2.1 部落や部落出身者に対する差別意識や態度 <Q9「部落差別があると思うか」>

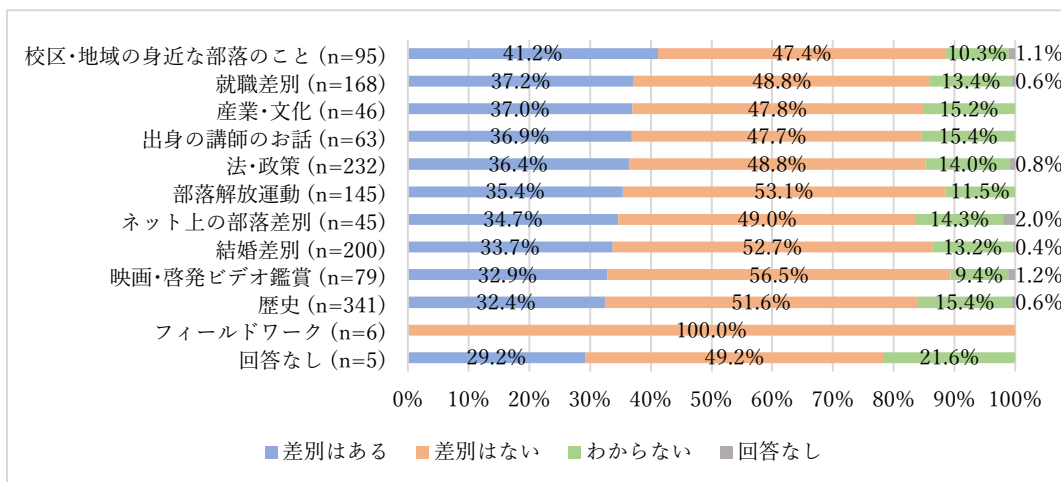
「本調査」の基本報告に、Q7「部落問題学習経験」とのクロス集計が示されているので、ここではQ8「部落問題学習内容」とのクロス集計を見ていく。

2.1.1 Q8「部落問題学習内容」とQ9.1「日常の交流や交際において部落差別があると思うか」とのクロス集計



「部落問題学習内容」と「日常の交流や交際において部落差別があると思うか」の質問に対する回答とをクロス集計した上のグラフを見ると、「日常の交流や交際」における「差別はない」の割合は、少数事例である「フィールドワーク (n=6)」以外の全ての「学習内容」において、67.7%~78.3%を占め高い割合になっている。このことから、現行の「部落問題学習」は、日常的活動に見られる差別事象にフォーカスを当てて学習されているとは必ずしも言えない状況であることが推察される。なお、「フィールドワーク」の分析にあたっては、学習経験者が6名であり、この人数を母数にするとパーセンテージの変動が大きくなるため、本報告では分析対象から除く。以下、同様である。

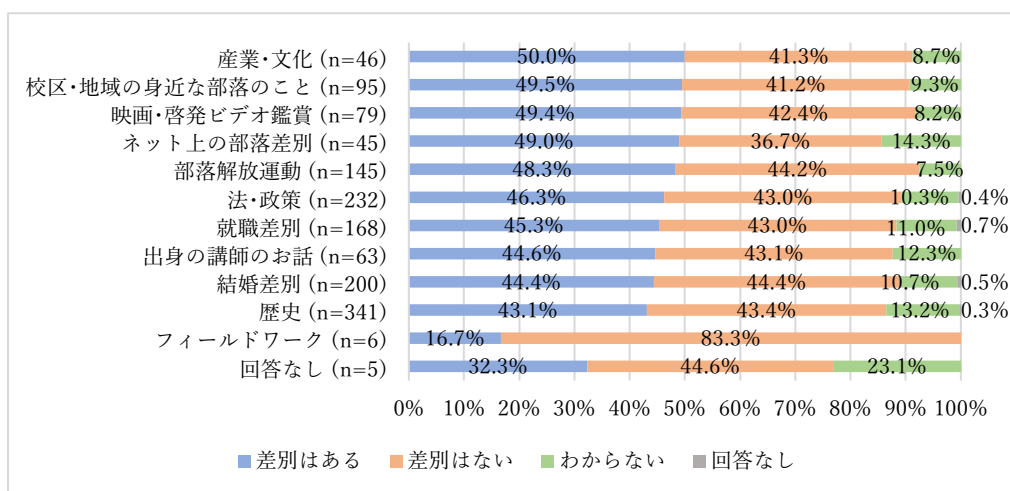
2.1.2 Q8「部落問題学習内容」とQ9.2「就職の際に部落差別があると思うか」とのクロス集計



次に、「部落問題学習内容」と「就職の際に部落差別があると思うか」の質問に対する回答とをクロス集計した上のグラフを見ると、「就職の際」の「差別はない」の割合は、全ての「学習内容」において、

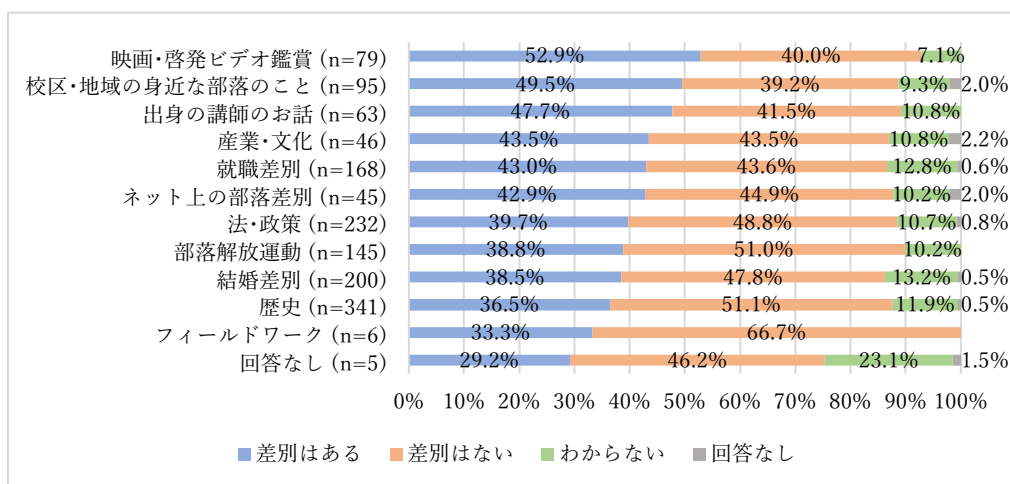
「差別はある」の割合より高くなっており、「就職の際の差別はない」と考える層が多数であることがわかる。また、「わからない」の割合は、少数事例である「フィールドワーク (n=6)」以外の全ての「学習内容」において、9.4%~15.4%を占めており、相対的に高くなっており、「就職差別」の実態がわかりやすく学習されているとは言えない状況が見られる。一方、「差別はある」の割合が最も高い「部落問題学習内容」は、「校区・地域の身近な部落のこと」(41.2%)で、「就職差別」(37.2%)が二番目に続くが、実際は、「就職差別」の「差別はない」割合より11.6ポイント低くなっている。本来、「就職差別」に関する「部落問題学習」は、「就職差別」の実態を学習することが目的になるはずであるが、「本調査」では、逆の結果となっており、この要因については、今後さらに分析が必要であると思われる。

2.1.3 Q8「部落問題学習内容」と Q9.3「結婚の際に部落差別があると思うか」とのクロス集計



次に、「部落問題学習内容」と「結婚の際に部落差別があると思うか」の質問への回答とのクロス集計した上のグラフを見ると、少数事例である「フィールドワーク (n=6)」以外の「学習内容」に関しては、「差別はある」と「差別はない」の割合の差は拮抗しているものの、全体的には「差別はある」の割合の方が高いことがわかる。このことから、多岐にわたる学習内容を通じて「結婚差別」はあるという認識が一定程度醸成されていることが推察される。一方、「結婚差別」の「差別はある」と「差別はない」の割合はいずれも44.4%で同数であったが、この要因として、差別を乗り越えて結婚したケースについて「差別はない」と理解されている可能性が考えられるが、「結婚差別」の学習のあり方についても、今後さらに分析が必要であると思われる。

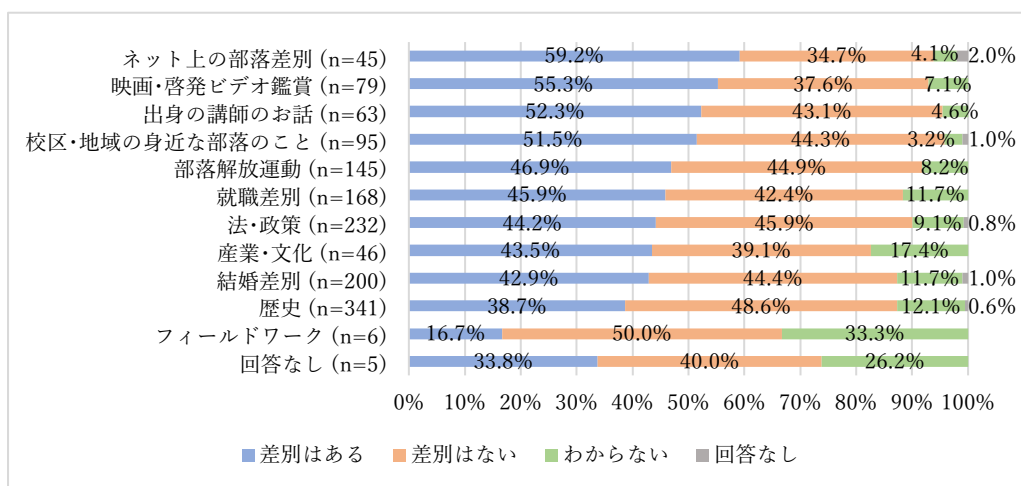
2.1.4 Q8「部落問題学習内容」と Q9.4「引っ越し住宅購入の際に部落差別があると思うか」とのクロス集計



次に、「部落問題学習内容」と「引っ越し住宅購入の際に部落差別があると思うか」の質問に対する回答とをクロス集計した上のグラフを見ると、「学習内容」によって「差別はある」と「差別はない」の割合の差が大きく開いていることがわかる。例えば、「差別がある」の割合が最も高い「映画・啓発ビデオ鑑賞」では、「差別はある」は52.9%、「差別はない」は40.0%で、その差は12.9ポイントであるが、このことから「映画・啓発ビデオ鑑賞」は「引っ越し住宅購入の際に部落差別がある」とする認識を醸成する「学習内容」であることが示唆される。一方、「差別はある」の割合が最も低い「歴史」は、「差別はある」が36.5%、「差別はない」は51.1%で、その差は14.6ポイントであり、このことから、「歴史」は「引っ越し住宅購入の際に部落差別がある」とする認識を醸成する「学習内容」であるとは必ずしも言えないことがわかる。

加えて、「差別はある」の割合が高かった「学習内容」としては、「映画・啓発ビデオ鑑賞」に次いで、「校区・地域の身近な部落のこと」(49.5%)や「出身の講師のお話」(47.7%)が挙げられており、これらは「地域や人と直接関わる学習」として取り組まれている「学習内容」である。これらの結果から、「部落という土地への忌避意識」に関しては、「結婚差別」に関する学習内容とは異なり、取り上げる学習内容の偏りが示唆されると同時に、「土地への忌避意識」は部落差別につながるということがわかりやすく学習されているとは必ずしも言えない現状があることが推察される。

2.1.5 Q8「部落問題学習内容」とQ9.5「ネット上の投稿の際に部落差別があると思うか」とのクロス集計

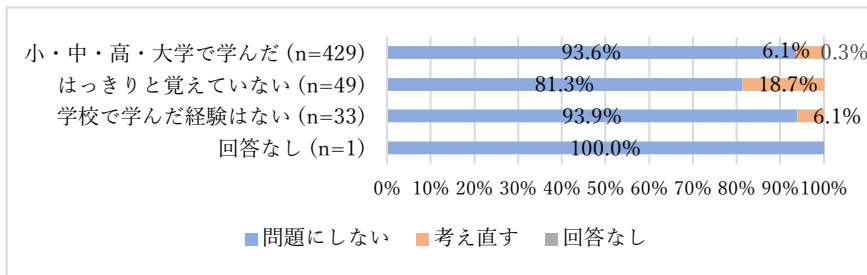


次に、「部落問題学習内容」と「ネット上の投稿の際に部落差別があると思うか」の質問に対する回答とのクロス集計をした上のグラフを見ると、全体的には「ネット上の差別はある」の割合は、「差別はない」の割合より低いことがわかる。また、「学習内容」によって「ネット上の差別はある」と認識する割合に差が見られる。例えば、「ネット上の部落差別」は、「学習経験者」の母数は45名と多いとは言えないが、「差別はある」と認識する割合が最も高く59.2%となっている一方、「学習経験者」の母数が341名に上る「歴史」が最も低く38.7%で、「ネット上の部落差別」と「歴史」の差は、20.5ポイントである。「歴史」の「わからない」割合が12.1%で相対的に高くなっている点も看過できない。これらの結果から、現行の部落問題学習において中心的に取り組まれている「歴史学習」は、「ネット上の部落差別」という新たな部落差別の様相に関する理解につながる学習内容であるとは必ずしも言えないことが示唆される。「歴史」学習以外に、「法・政策」学習についても同様の傾向が見られる。

2.2 人に対する差別意識 <Q11「結婚の条件を満たした相手が部落出身者であった場合」>

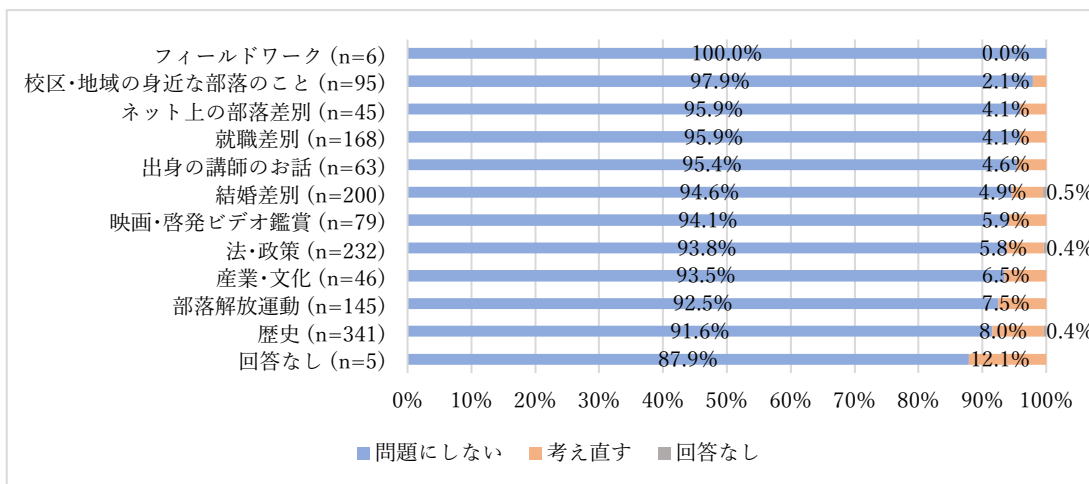
「本調査」では、Q11として「結婚の際の部落出身者に対する態度」について質問をしていることから、ここではQ7「部落問題学習経験」とQ8「学習内容」をクロス集計しそれぞれの関係を見ていく。クロス集計するにあたっては、「部落問題学習経験」は、「小学校から大学までの学校で学んだ」「(どこで学んだか)ははっきりと覚えていない」「学校で学んだ経験はない」「回答なし」の4つのグループに類型化し比較している。なお、学校での「部落問題学習経験」には、結婚や部落内の不動産の購入など人生設計に関わる内容などが含まれているため、小・中・高校に加え大学も含めた。以下、同様である。

2.2.1 Q7「部落問題学習経験」とQ11「結婚の条件を満たした相手が部落出身者であった場合」とのクロス集計



「部落問題学習経験」と「結婚の条件を満たした相手が部落出身者であった場合」とをクロス集計した上のグラフを見ると、「結婚の条件を満たした相手が部落出身者であった場合」に「問題にしない」の割合は、全体として8割以上を占めており、結婚差別を克服しようとする意思を示す考えが大半を占めていることがわかる。また、「学習経験」の有無で比較した際、「問題にしない」割合と「考え直す」の割合がほぼ同数であることから、「学習経験」の有無による違いは見られない。

2.2.2 Q8 「部落問題学習内容」と Q11 「結婚の条件を満たした相手が部落出身者であった場合」とのクロス集計

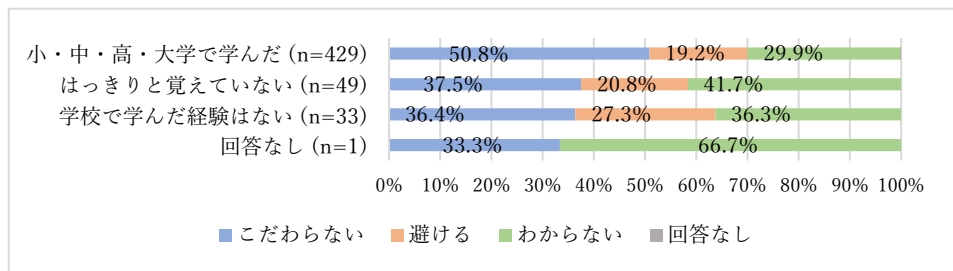


次に、「部落問題学習内容」と「結婚の条件を満たした相手が部落出身者であった場合」とをクロス集計した上のグラフを見ると、「結婚の条件を満たした相手が部落出身者であった場合」に部落出身であることは「問題にしない」の割合は、全ての「学習内容」において9割以上を占めており、「部落問題学習内容」の相違で差は見られない。この結果から、「結婚の条件を満たした相手であれば、部落出身であるかは問題としない」という結婚差別を否定する意識や態度がどの「学習内容」においても醸成されていることが推察される。

2.3 土地に対する忌避意識 <Q12 「部落や同じ校区内の物件は避けることがあると思うか」>

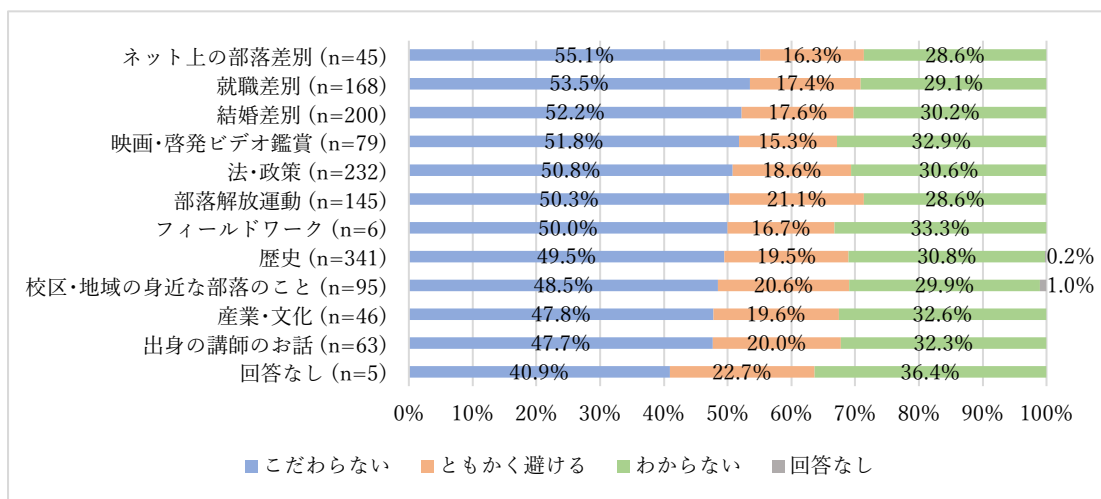
「本調査」では、Q12として「土地への忌避態度」について質問していることからここでは、Q7「部落問題学習経験」とQ8「学習内容」とをそれぞれクロス集計しその関係を見ていく。

2.3.1 Q7「部落問題習経験」と Q12「部落や同じ校区内の物件は避けることがあると思うか」とのクロス集計



「部落問題習経験」と「部落や同じ校区内の物件は避けることがあると思うか」の質問に対する回答とをクロス集計した上のグラフを見ると、「部落や同じ校区内の物件」に「こだわらない」の割合は、「小・中・高・大学で学んだ」が50.8%と最も高く、「学校で学んだ経験なし」の36.4%より14.4ポイント高かった。一方、「部落や同じ校区内の物件」を「避ける」の割合は、「学校で学んだ経験なし」は27.3%で最も高く、「小・中・高・大学で学んだ」の19.2%より8.1ポイント高かった。また、「わからない」の割合は、いずれのグループにおいても相対的に高いが、「小・中・高・大学で学んだ」は29.9%で、「学校で学んだ経験なし」の36.4%より6.5ポイント低かった。これらの結果から、学校における「学習経験」が「土地への忌避意識」を抑制する方向に一定程度影響を与えていることが推察される。

2.3.2 Q8「部落問題学習内容」と Q12「部落や同じ校区内の物件は避けることがあると思うか」とのクロス集計



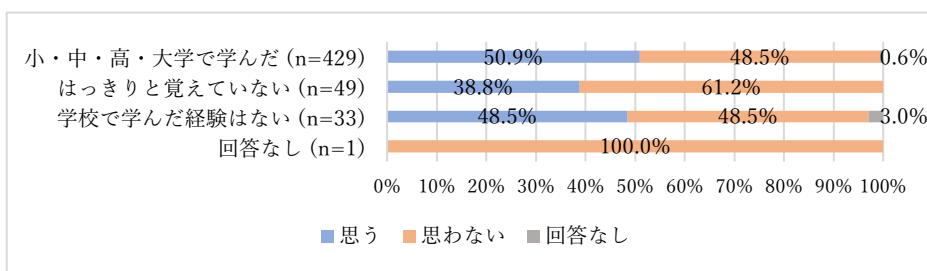
次に、「部落問題学習内容」と「部落や同じ校区内の物件は避けることがあると思うか」の質問に対する回答とのクロス集計した上のグラフを見ると、「部落や同じ校区内の物件」に「こだわらない」が全体として約5割を占め、「ともかく避ける」を上回った。そして、「部落問題学習内容」の相違による「土地への忌避意識」の差は見られなかった。ところが、「わからない」の割合が、全体の約3割を占めており、「ともかく避ける」より高くなっている。この結果から、いずれの「学習内容」も、「部落や同じ校区内

の物件を避けることは差別行為である」ことが一定程度理解される内容になってはいるものの、十分理解されているとは言えない学習状況が推察される。

2.4 4つの場面設定における土地に対する忌避意識 <Q14、Q15、Q16、Q17>

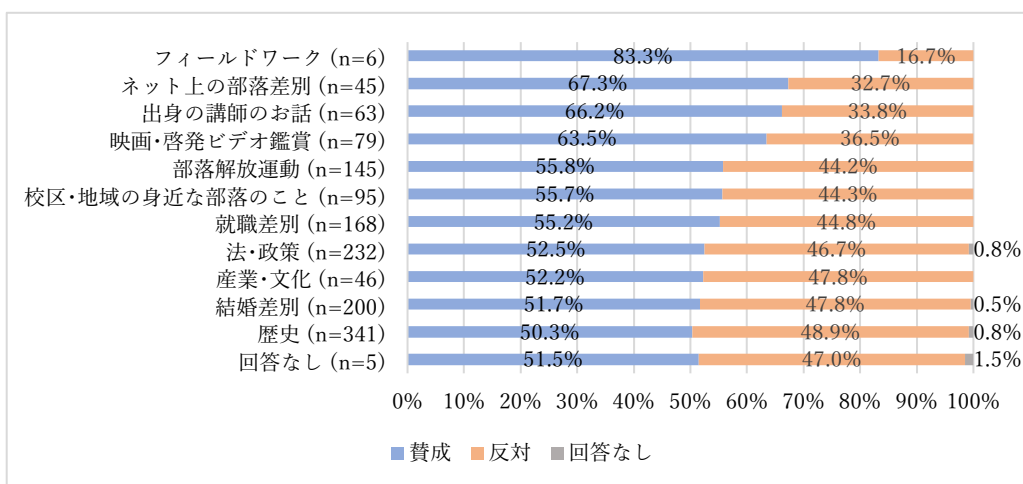
「本調査」では、「土地に対する忌避意識」に関して、4つの場面（Q14、Q15、Q16、Q17）を設定しさらに深く質問をしている。以下、Q7「部落問題学習経験」とQ8「部落問題学習内容」とをそれぞれクロス集計しそれらの関係を見ていく。

2.4.1 Q7「部落問題学習経験」とQ14「条件の良い部落内物件：「そこに住むと部落出身と思われるかもしれない」と契約をやめたことは差別だと思うか」とのクロス集計



「部落問題学習経験」とクロス集計した上のグラフを見ると、「部落問題学習経験の有無」に関わらず、「部落内の物件の契約を解消することは差別行為であると思うか」の質問に対して「思う」と「思わない」の割合がそれぞれ約 5 割を占め、拮抗していることがわかる。そして、学校における「部落問題学習経験」による影響については、有無との間に差は見られない。

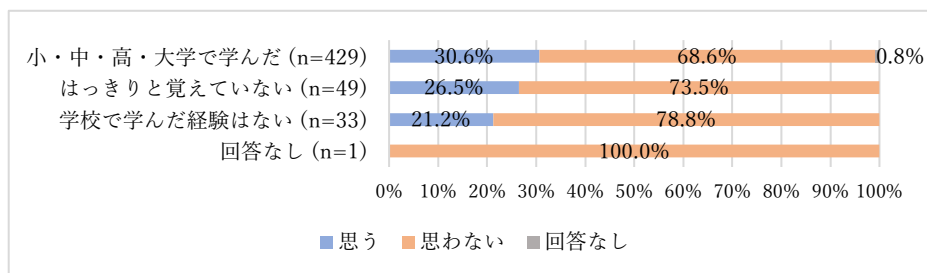
2.4.2 Q8「部落問題学習内容」とQ14「条件の良い部落内物件：「そこに住むと部落出身と思われるかもしれない」と契約をやめたことは差別だと思うか」とのクロス集計



次に、「部落問題学習内容」とクロス集計した上のグラフを見ると、「条件の良い部落内物件の契約を「そこに住むと部落出身と思われるかもしれない」という理由でやめたことを差別だと思うか」という質問に対する「賛成」の割合は、全ての「学習内容」において 5 割以上を占めており、「反対」の割合と

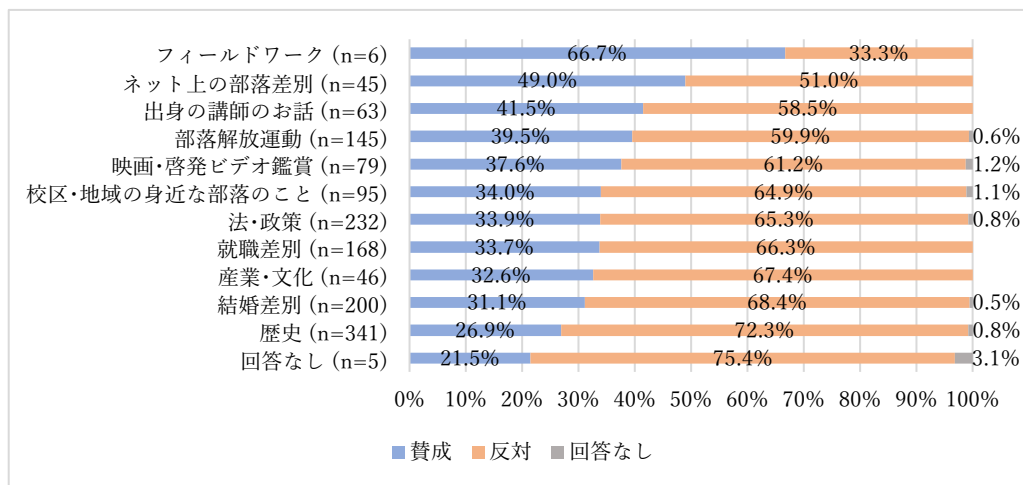
拮抗しているものの、全体としては「賛成」の割合が「反対」の割合より高くなっている。「賛成」の割合が高い「学習内容」は、「ネット上の部落差別」(67.3%)、「出身の講師のお話」(66.2%)、「映画・啓発ビデオ鑑賞」(63.5%)で、「賛成」の割合は6割を超える。これらの結果から、学校において、「差別問題学習」や「人と直接関わる学習」「メディアを活用した学習」などを通じて、「部落出身であると見なされることを忌避するため部落内の物件を契約しないことは差別行為である」とする認識が一定程度醸成されていることが推察される。

2.4.3 Q7「部落問題学習経験」と Q15「条件の良い部落内物件：「不動産価値が上がらず経済的メリットがないかも」と購入を見送ったのは差別だと思うか」とのクロス集計



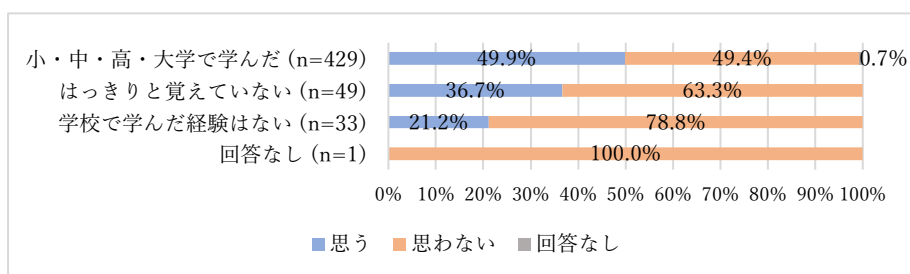
「部落問題学習経験」とクロス集計した上のグラフを見ると、「経済的メリットを理由に不動産の購入の回避は差別行為と思うか」の質問に対する「思わない」の割合が、「部落問題学習経験」の有無に関わらず、7割前後を占め、「思う」の2倍以上となっている。このことから、学校内外で「経済的メリットがないことを理由に部落内の不動産の購入を回避することは差別行為にはならない」とする認識が浸透していることがわかる。しかし、そんな中でも、「小・中・高・大学で学んだ」の「差別行為と思う」割合は30.6%で、「学習未経験」より9.4ポイント高くなっている。この意味で、「経済的メリットを理由に不動産の購入の回避は差別行為である」という認識の醸成への学校における「部落問題学習経験」の影響が示唆される。

2.4.4 Q8「部落問題学習内容」と Q15「「部落内不動産価値が上がらず経済的メリットがないかも」と購入を見送ったのは差別だと思うか」とのクロス集計



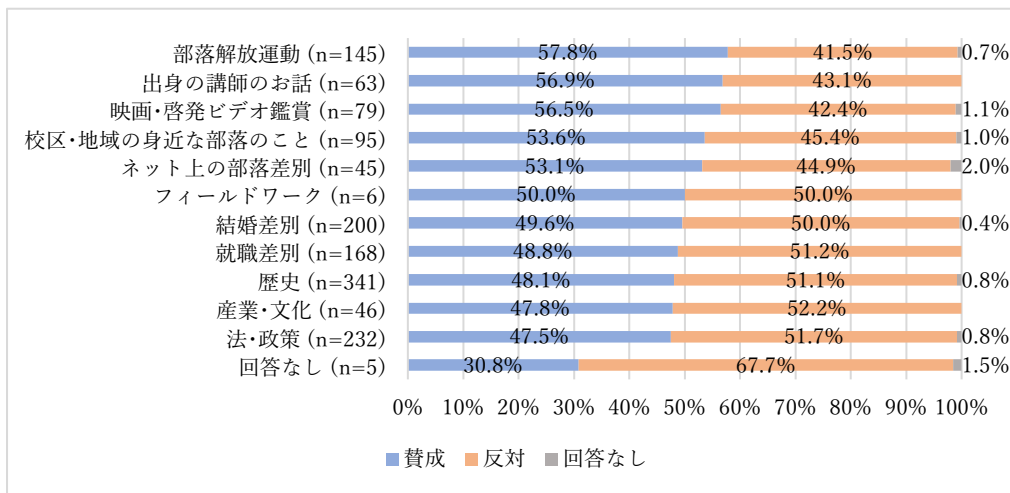
「部落問題学習内容」とクロス集計した上のグラフを見ると、「部落内不動産価値が上がらず経済的メリットがないかも」と購入を見送ったのは差別だと思うか」の質問に対する「反対」の割合は、「学習内容」全体で5割から7割を占めており、「賛成」より高くなっている。また、「学習内容」によって、「賛成」と「反対」の割合が大きく異なっていることがわかる。具体的には、「ネット上の部落差別」の「賛成」の割合は49.0%で、「反対」は51.0%と拮抗しているが、「歴史」の「賛成」の割合は26.9%、「反対」の割合は72.3%で「賛成」の2倍以上である。「賛成」と「反対」の割合の差が大きく表れているのは、「歴史学習」に加え、「差別問題学習」や「法・政策」に関する学習など学校における「部落問題学習」の中で中心的に取り組まれている「学習内容」にその傾向が見られる。

2.4.5 Q7「部落問題学習経験」と Q16「条件の良い部落内物件：土地価格が周辺より相対的に安価となっているのは差別だと思うか」とのクロス集計



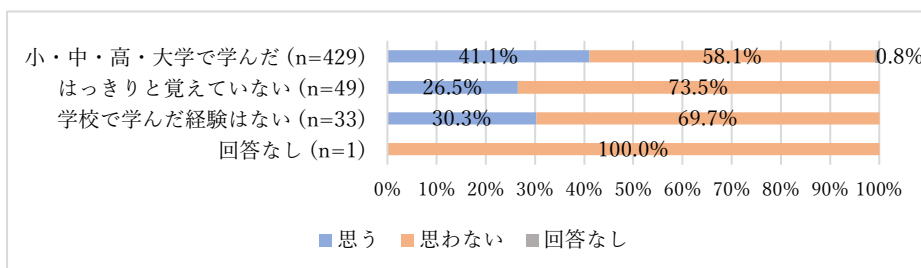
「部落問題学習経験」とクロス集計した上のグラフを見ると、「部落内の地価が周辺より相対的に安価となっているのは差別だと思うか」の質問に対して「思う」の割合は、「部落問題学習経験者」は49.9%、「学習未経験者」は21.2%で、「学習経験者」の方が28.7ポイント高くなっており、「学習経験」の有無で大きな違いが見られる。また、「学習経験者」の「思う」と「思わない」の割合は拮抗しているが、「学習未経験者」は、「思わない」の割合が78.8%に上り、「思う」の3倍以上となっている。これらの結果から、学校での「部落問題学習」を通じて「部落内の地価が部落外より安価であることは部落差別の結果」であることが一定学習されていることが推察される。

2.4.6 Q8「部落問題学習内容」と Q16「部落内の地価が周辺より安価となっているのは差別だとする認識」とのクロス集計



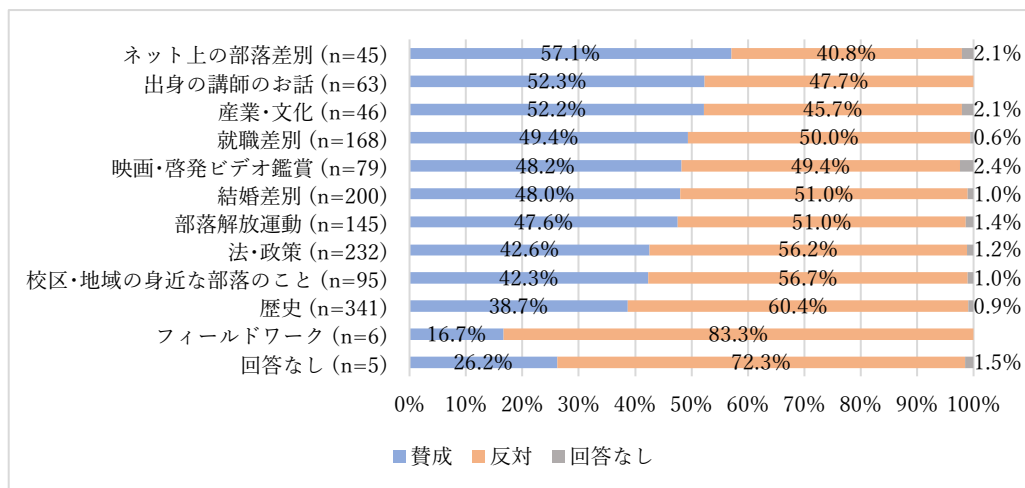
「部落問題学習内容」とクロス集計した上のグラフを見ると、全ての「学習内容」において、「部落内の地価が周辺より安価となっているのは差別」だとする考え方に対する「賛成」と「反対」の割合は拮抗しているものの、全体としては、「反対」の方が「賛成」より高くなっている。この傾向は、部落問題学習として中心的に取り組みされている「学習内容」、具体的には、「結婚差別」「就職差別」「歴史」「法・政策」に見られる。

2.4.7 Q7「部落問題学習経験」と Q17「条件の良い部落内物件：「住宅を借りる／購入する際に物件の場所が部落かを調べるのが差別だと思うか」とのクロス集計



「部落問題学習経験」とクロス集計した上のグラフをみると、「住宅を借りる／購入する際に物件の場所が部落かを調べることは差別だと思うか」の質問に対し、全体的に「思わない」の割合が「思う」の割合より高くなっている。また、「思う」の割合は「学習経験者」で41.1%、「学習未経験者」は30.3%で、「学習経験者」の方が10.8ポイント高くなっており「学習経験」の有無に違いが見られる。これらの結果から、学校における「部落問題学習経験」の有無に関わらず、概して「部落内の物件の場所を調べることは差別行為でない」と認識されていることが示唆される。しかし、そんな中でも、「部落問題学習経験者」の方が「未経験者」より「「部落内の物件の場所を調べることは差別行為である」と認識している人は多く、「部落問題学習経験」による影響が見られる。

2.4.8 Q8「部落問題学習内容」と Q17「住宅を借りる／購入する際に物件の場所が部落かを調べるのが差別だと認識する」とのクロス集計



「部落問題学習内容」とクロス集計した上のグラフを見ると、「学習内容」によって「住宅を借りる／購入する際に物件の場所が部落かを調べることは差別行為である」とする認識の醸成の度合いは、「学習内容」によって異なる傾向が見られ、現行の「部落問題学習」では「住宅を借りる／購入する際に物件の場所が部落かを調べることは差別行為である」ということが十分に学習されているとは必ずしもいえない状況が示唆される。

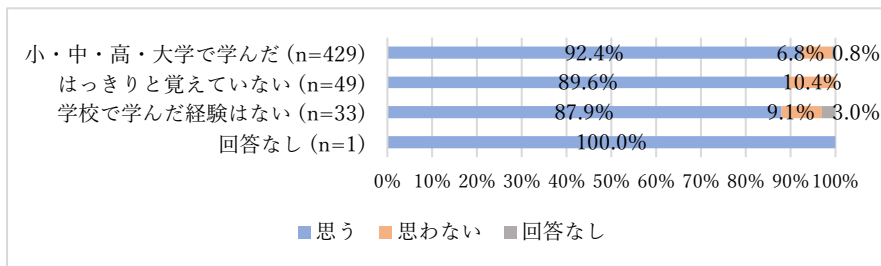
2.5 古典的／現代的／リベラル・レイシズム

「本調査」の基本報告で述べられている通り、「本調査」では「露骨で直接的な偏見、ステレオタイプ、生物学的・本質主義的な見方による劣等視など」の「古典的レイシズム」と「差別の否認・過小評価、個人責任化、権利要求を過剰・不当視することなど」の「現代的レイシズム」に対する否定的思想が「部落問題学習」を通じて醸成されていることが示された。一方、「善意や個人主義、普遍主義、形式的平等観による無自覚な差別」として定義される「リベラル・レイシズム」を支持する思想の浸透が浮き彫りになった。そこで、これら3つのレイシズムに象徴される差別意識と Q7「部落問題学習経験」及び Q8「部落問題学習内容」との関係性をクロス集計しながら見ていくことにする。

クロス集計の対象にした質問項目は、「本調査」の基本報告の表 Q13「部落や部落出身者に対して感じること」の中の「賛成」が最多の上位3つ【Q13.4】【Q13.14】【Q13.16】と「部落や部落出身者に対して感じること」に「反対」が最多の上位3つ【Q13.6】【Q13.9】【Q13.13】である。

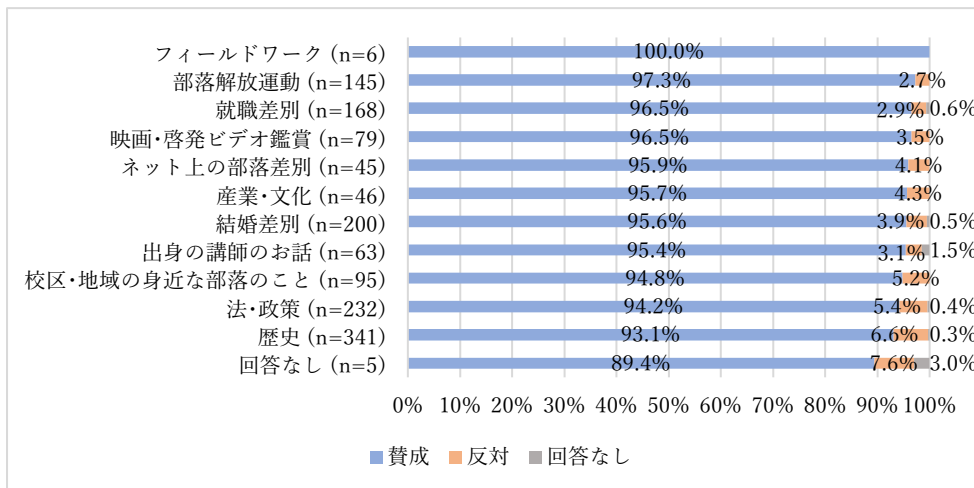
2.5.1 Q13.4「私はどんな相手も「一人の人間として」接する。部落出身だからといって差別することはない」

① Q7「部落問題学習経験」とのクロス集計



「部落問題学習経験」とクロス集計した上のグラフを見ると、「私はどんな相手も「一人の人間として」接する。部落出身だからといって差別することはない」という考え方に象徴される「リベラル・レイシズム」への支持を示す「思う」の割合は、「部落問題学習経験」の有無に関わらず約9割を占めている。これは、「私はどんな相手も「一人の人間として」接する。部落出身だからといって差別することはない」という考え方が学校をはじめ社会一般に浸透していることを示していると言える。

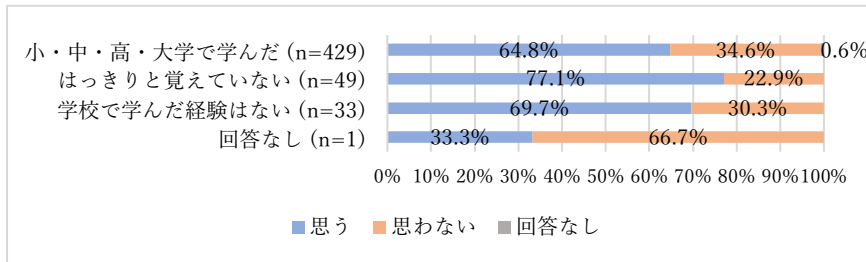
② Q8「部落問題学習内容」とのクロス集計



次に、「部落問題学習内容」とクロス集計した上のグラフを見ると、全ての「学習内容」において、「私はどんな相手も「一人の人間として」接する。部落出身だからといって差別することはない」とする考え方に象徴される「リベラル・レイシズム」への支持を示す「思う」が9割以上を占めている。このことから、現行の「部落問題学習」では、部落出身者に対して「一人の人間として接していれば差別することはない」という「リベラル・レイシズム」を支持する思想が埋め込まれながら学習されていることが推察される。

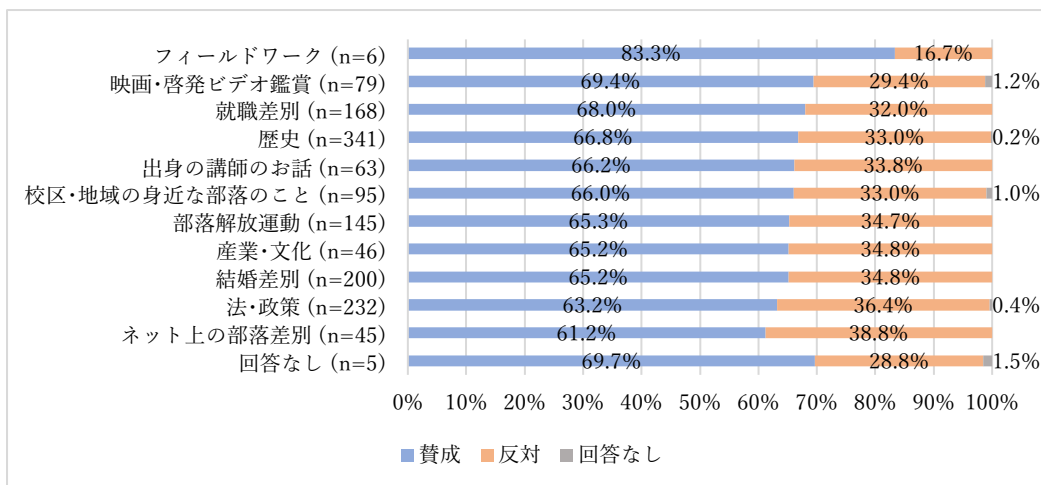
2.5.2 Q13.14「人間は一人ひとりちがう。だから部落出身者も自分の出身をいちいち気にするべきでない」

① Q7「部落問題学習経験」とのクロス集計



本設問 Q13.14 は、Q13.4 と違い、「私たちは部落出身者を一人の人間として見ており、差別することはないので、部落出身者も気にするべきでない」という差別の要因を部落出身者の気の持ちように帰する考え方への問いとなっている。ここで、「部落問題学習経験」とクロス集計した上のグラフを見ると、「人間は一人ひとりちがう。だから部落出身者も自分の出身をいちいち気にするべきでない」とする考え方に象徴される「リベラル・レイシズム」の支持を示す「思う」の割合は、「部落問題学習経験」の有無で比較すると、いずれも 6 割を超えていることから、差別の要因を部落出身者の気の持ちように帰する考え方に象徴される「リベラル・レイシズム」を支持する思想が学校内外で浸透しつつあることが示唆される。一方、「リベラル・レイシズム」の不支持を示す「思わない」の割合は、「学習経験者」で 34.6%、「学習未経験者」で 30.3%となっており、両者を比較すると「学習経験者」の方が若干高くなっていることから「学習経験」の影響が示唆される。

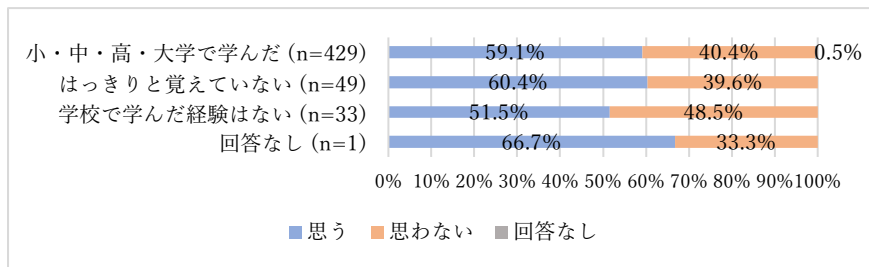
② Q8「部落問題学習内容」とのクロス集計



次に、「部落問題学習内容」とクロス集計した上のグラフによると、「人間は一人ひとりちがう。だから部落出身者も自分の出身をいちいち気にするべきでない」という考え方に象徴される「リベラル・レイシズム」を支持する「思う」の割合は、「学習内容」全体として 6 割を占めており、学校での「部落問題学習」における「リベラル・レイシズム」の浸透が示唆される。ところが一方で、「ネット上の部落差別」や「部落問題学習内容」の中でも母数が高い「結婚差別」「法・政策」の「反対」の割合は相対的に高くなっており、「差別の要因を個人の気持ちの持ちように帰す」考え方を支持する「リベラル・レイシズム」を批判的に捉える学習の影響が示唆される。

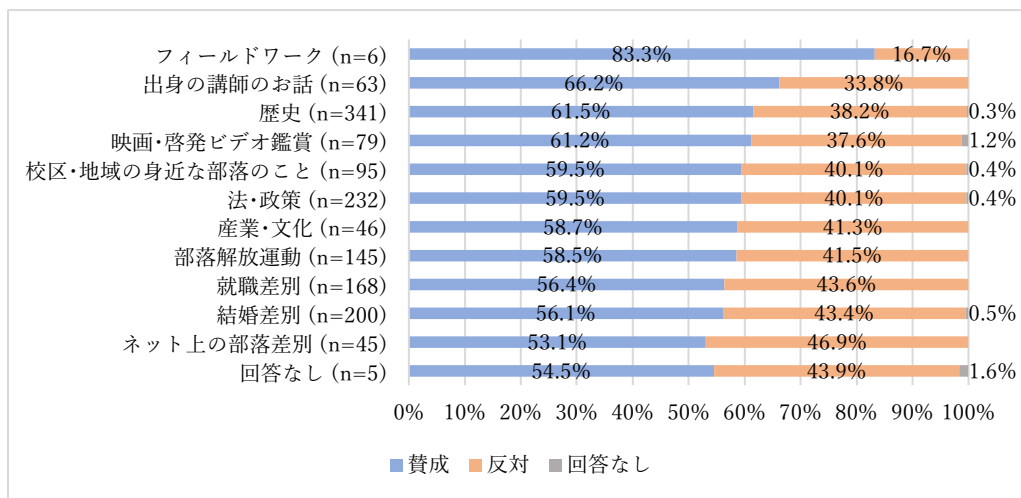
2.5.3 Q13.16 「部落出身者は（そのことを）あまり表に出さず、もっと個人として社会に参入すべきだ」

① Q7 「部落問題学習経験」とのクロス集計



「部落問題学習経験」とクロス集計した上のグラフを見ると、「部落出身者は（そのことを）あまり表に出さず、もっと個人として社会に参入すべきだ」とする考え方に象徴される「リベラル・レイシズム」への支持を示す「思う」の割合は、学校における「部落問題学習経験」の有無で比較すると、「学習経験者」は59.1%、「未経験者」は51.5%で、「学習経験者」の方が7.6ポイント高くなっている。このことから、学校の「部落問題学習」を通じて、「部落出身者は、個人として社会に参入すべきだ」とする考え方に象徴される「リベラル・レイシズム」の思想が学習されつつあることが推察される。

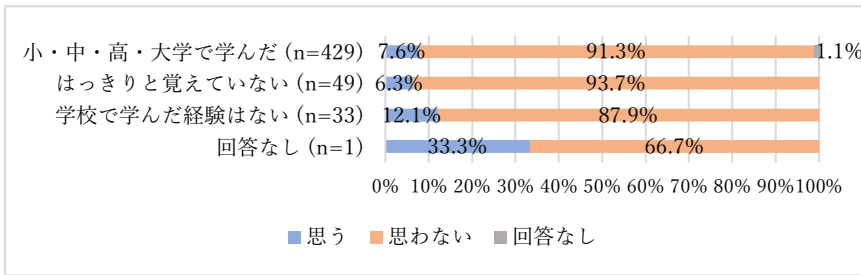
② Q8 「部落問題学習内容」とのクロス集計



次に、「部落問題学習内容」とクロス集計した上のグラフを見ると、「部落出身者は（そのことを）あまり表に出さず、もっと個人として社会に参入すべきだ」とする考え方に象徴される「リベラル・レイシズム」への支持を示す「賛成」の割合が、「学習内容」全体を通して、5割から6割を占め、「反対」を上回っていることがわかる。「賛成」の割合が高い「部落問題学習内容」には、「出身の講師のお話」（66.2%）、「歴史」（61.5%）、「映画・啓発ビデオ鑑賞」（61.2%）が挙げられるが、この結果から、従来の「部落問題学習」では、部落差別がある中でも差別に抗い、差別の解決に向けて活躍する（した）個人にフォーカスが当たる傾向があり、そのことで部落出身者個人の自己実現や活躍を支持する考え方が醸成されていることが示唆される。

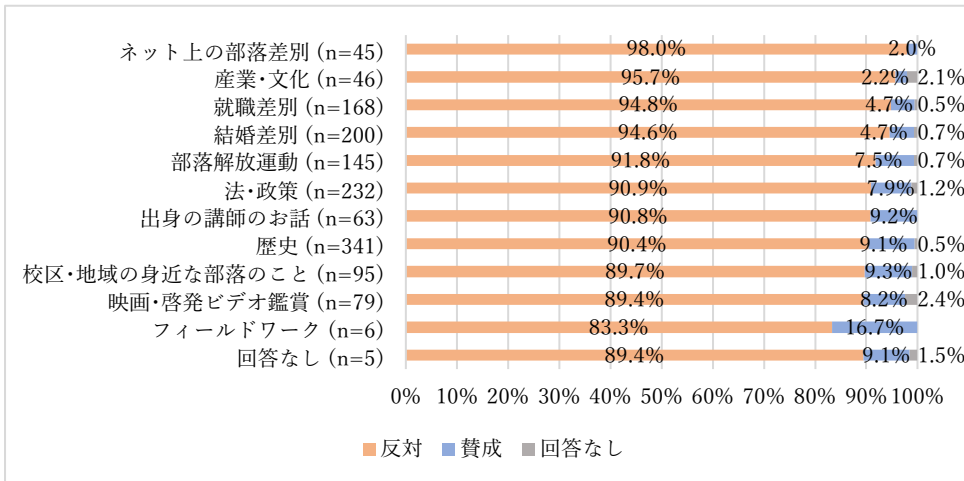
2.5.4 Q13.6 「部落出身者は行政から優遇されていると思う」

① Q7「部落問題学習経験」とのクロス集計



「部落問題学習経験」とクロス集計した上のグラフを見ると、「部落出身者は行政から優遇されている」という考え方に象徴される「現代的レイシズム」に対して不支持を示す「思わない」の割合は、「部落問題学習経験」の有無に関わらず8割以上を占めている。この結果から、学校内外において「部落出身者は行政から優遇されている」という考え方に象徴される「現代的レイシズム」の不支持を示す思想が浸透していることが推察される。また、「現代的レイシズム」の支持を示す「思う」の割合を、学校における「部落問題学習経験」の有無で比較すると、「学習経験者」の方が若干低いことから、学校における「部落問題学習」が「現代的レイシズム」の思想の抑制に一定程度影響を与えていることが推察される。

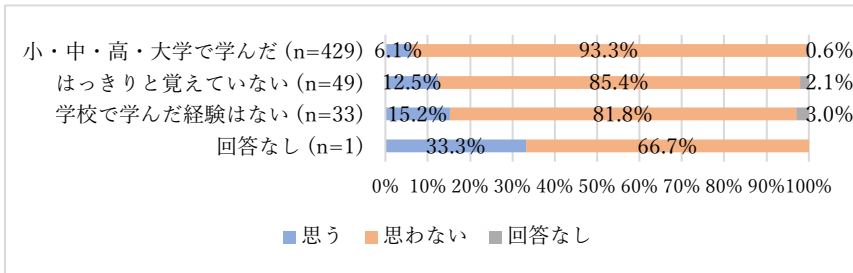
② Q8「部落問題学習内容」とのクロス集計



次に「部落問題学習内容」とクロス集計した上のグラフを見ると、「部落出身者は行政から優遇されていると思う」という考え方に象徴される「現代的レイシズム」に対して不支持を示す「反対」の割合は、すべての「学習内容」において8割以上を占めている。この要因に、2002年の同和対策事業関連法（以下、「法」）の失効に伴い同和行政が一般施策に移行されたことによって部落出身者が行政から優遇されているとする認識の低下の影響が考えられる。

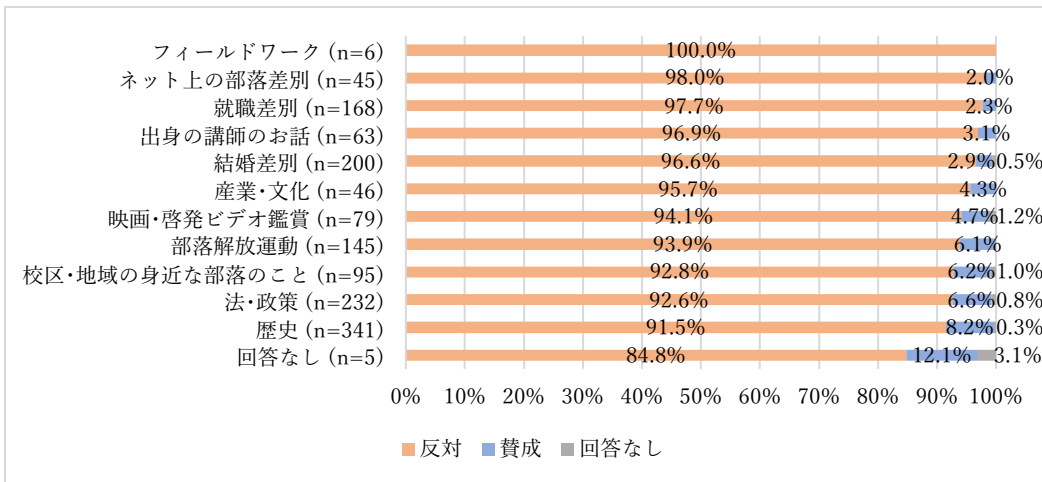
2.5.5 Q13.9「部落出身者は福祉に頼りすぎだと思う」

① Q7「部落問題学習経験」とのクロス集計



次に「部落問題学習経験」とクロス集計した上のグラフを見ると、「部落出身者は福祉に頼りすぎだと思う」という考え方に象徴される「現代的レイシズム」に対して不支持を示す「思わない」の割合は、「学習経験」の有無に関わらず8割以上を占めており、「現代的レイシズム」への不支持を示す思想が学校をはじめ社会一般に浸透していることが示唆される。また、「思わない」の割合を学校における「部落問題学習経験」の有無で比較すると、「学習経験者」は93.3%、「学習未経験者」は81.8%となっており、「学習経験者」の方が「学習未経験者」より11.5ポイント高くなっている。このことから、「現代的レイシズム」への不支持を示す思想の浸透には、学校における「部落問題学習」による影響が考えられる。

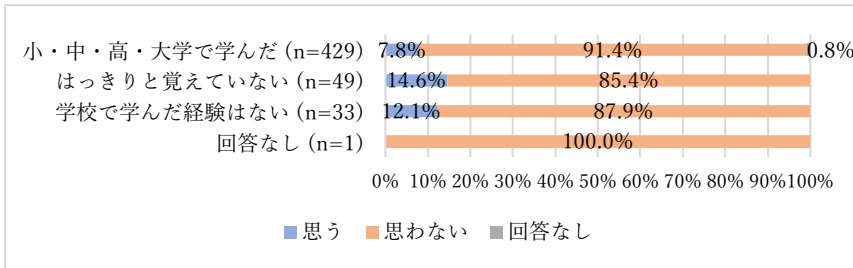
② Q8「部落問題学習内容」とのクロス集計



次に、「部落問題学習内容」とクロス集計した上のグラフを見ると、「部落出身者は福祉に頼りすぎだと思う」という考え方に象徴される「現代的レイシズム」に対して不支持を示す「反対」の割合は、すべての「学習内容」において9割以上を占めている。この結果から、先に見た「部落は行政から優遇されていると思う」のクロス集計の結果と同様に、「法」失効に伴う同和行政の一般施策への移行によって、部落出身者は福祉施策に頼られなくなったとする思想が「部落問題学習」に埋め込まれながら学習されていることが示唆される。

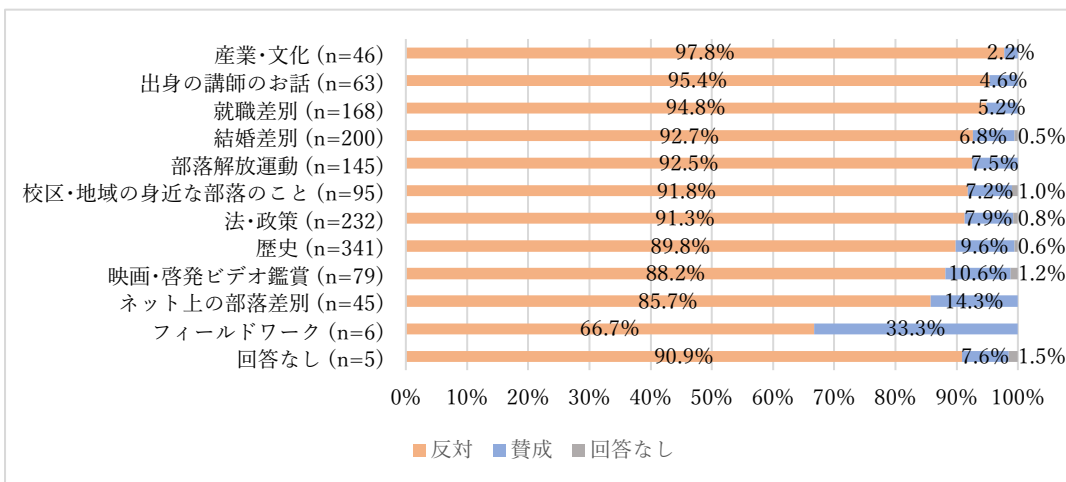
2.5.6 Q13.13「部落差別を受けるのは、何か劣っているところがあるからだと思う」

① Q7「部落問題学習経験」とのクロス集計



「部落問題学習経験」とクロス集計した上のグラフを見ると、「部落差別を受けるのは、何か劣っているところがあるからだと思う」という考え方に象徴される「古典的レイシズム」への不支持を示す「思わない」の割合は、「学校における部落問題学習経験」の有無に関わらず8割を超えている。この結果から、学校内外において「部落差別される要因を個人の属性や能力、責任に帰す」考え方に象徴される「古典的レイシズム」への不支持を示す思想が浸透していることが示唆される。

② Q8「部落問題学習内容」とのクロス集計



次に、「部落問題学習内容」とクロス集計した上のグラフを見ると、「部落差別を受けるのは、何か劣っているところがあるからだと思う」という考え方に象徴される「古典的レイシズム」への不支持を示す「反対」の割合は、「学習内容」全体において、8割から9割を占めている。また、「反対」の割合が最も高い「学習内容」は、「産業・文化」(97.8%)で、二番目に高いのは「出身の講師のお話」(95.4%)である。この他、「就職差別」や「結婚差別」などの「差別問題学習」も「反対」の割合が高い「学習内容」に挙げられている。これらの結果は、現行の部落問題学習では、長年部落内で継承されてきた「産業や文化」が社会的に価値あるものとして教材化されたり、「出身の講師のお話」では、部落出身者の様々な分野で活躍している姿や被差別の体験談などを聞き取り学習されることで「部落差別を受けるのは、部落出身者に何か劣っているところがあるからではない」とする思想が涵養されていることが要因となっていると推察される。また、「差別問題学習」においては、「就職差別」や「結婚差別」の事象を学習する中でこのような部落差別は「いわれの無い差別」であるという意識が形成されることで「古典的レイシズム」への不支持を示す思想が醸成されていると考えられる。

3. おわりに

以上、調査対象の大学生が経験した部落問題学習の経験や学習内容と大学生の部落や部落出身者に対する差別意識や態度、及び「古典的／現代的／リベラル・レイシズム」に象徴される部落問題の捉え方との関係についてクロス集計をてがかりに分析してきた。分析を通して得られた主な知見は以下の通りである。

1点は、程度の差はさまざまであるが、学校における「部落問題学習経験者」の方が「学習未経験者」より部落差別を認識する割合が高かった。「学習内容」との関係については、「就職差別」や「結婚差別」「ネット上の部落差別」などの「差別問題学習」や「校区・地域の身近な部落のこと」「出身の講師のお話」など「人や地域と直接関わる学習」を通じて部落差別の実態が学習されている。一方で課題としては、「差別問題学習」や「地域・人と直接関わる学習」は母数が相対的に低い点が挙げられる。2点は、現行の部落問題学習では、部落や部落差別の歴史が中心に学習されていることが「本調査」で明らかになっているが、人との交流や交際などの日常活動における差別事象やネット上の部落差別など新たな形態の差別事象への認識を醸成することが必ずしも重要視されていないという課題が示唆された。3点は、「土地への忌避意識」の問題は、偏見などの心理的差別のみならず、社会構造や法制度に関連した複雑な問題であるが、現行の「部落問題学習」は「土地に対する忌避意識」の学習に十分に取り組んでいるとはいえないという課題が示唆された。4点は、2002年の「法」の失効に伴い同和行政が一般施策に移行したことを背景として、「現代的レイシズム」や「古典的レイシズム」として表象される部落問題の認識に対する批判的観点が多く「部落問題学習内容」に埋め込まれながら学習されていることが示唆された。しかし一方、「リベラル・レイシズム」を支持する思想は、今日浸透しつつあるものの、現行の「部落問題学習」においては批判的に学習されていないという課題が浮き彫りになった。

以上が、「本調査」で得られた主な知見であるが、今後も引き続き詳細にわたる分析が求められる。